

## 先月の活動（11月）

日本語教室 11/8(木), 15, 22, 29(4回)  
11/16(日)秋の遠足 奈良



## 今月の活動（12月）

日本語教室 12/6(木), 13, 20 (3回)  
12/17(水) 草津市多文化共生推進プラン策定委員会（恩地）  
12/27(土) 教室開放日



●日本語教室の(M)は定例ミーティング ●( )内は参加者、または 参加予定者。敬称略

## 参加人数（11月）

	11/8	1115	11/22	11/29
学習者	27	26	18	26
スタッフ	26	22	20	24

## 会員の動き（11月）

〈入会〉 山田 稚子  
〈休会〉 なし  
〈退会〉 なし  
〈賛助会員〉 なし

「きずな」で教え始めた時、ほとんど話せなかった生徒が今では出張で中国人と日本語で話すと言う。丁寧な日本語で話す彼らは私の自慢です。

11月1日の堀野氏の「初級向け教え方講座」(2P 参照)の内容から、初級の学習者を教えるときに参考にしてほしいことをいくつかここに紹介します。

- 新しい文法はまず母語で理解してもらう。文法書かAIを活用するとよい。そこから自立学習を促す。
- 目前で必要な表現は、未習文法を無視して、提示する。たとえば、ムスリムの人に“お酒は飲めません”はたちまち必要。生活状況にあわせてすぐに使えるものを教える。
- 学習者にとっては、教科書よりボランティア自身の経験が一番興味深いので、それを踏まえて自前の教材をつくる。文法学習を自己表現(おしゃべり)につなげる。
- 日本語・文化をおしゃべりで互いに学び合う。日本語ボランティアは、交流を主目的とし、関係は対等であること。

※ボランティア指導者と生活者のための日本語教材として「にほんご これだけ」は使いやすい



オリーブには日本語能力は試験を目指す中・上級の学習者も多いので、彼らにはまた違ったアプローチが必要と思われますが、上下関係を作らず、友人として手助けするという立ち位置は同じですね。

オリーブはキラリエセンターとして部屋の予約や使用料で恩恵を受けています。これからもキラリエの部屋を借りて活動を続けるためにサポーターの登録要件である年2回キラリエで開催される対象事業への参加が必須ですが、今年度はまだ一度も参加できていません。3月までに次のどれかに参加出来そうな人はぜひ協力をお願いします。

1月17日（土）午後 市民活動交流会

2月6日（金）夜間 ワークショップ

3月3日（火）午前 講演会

詳細はまた決まり次第連絡します。  
ぜひ予定に入れておいてください。



編集後記：今年も残すところあと少し。振り返ってみれば、春には米不足、米価の高等、トランプ関税と不安なニュースに振り回され、秋には熊の襲撃、中国との関係悪化とこれまで不安をかき立てられる出来事が。なにか心がざわざわする1年だったような気がします。みなさんの1年はどうでしたか。

来年はもっといい年になりますように。世界に平和が訪れますように。

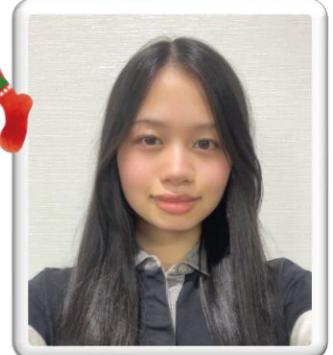
みなさんが健やかで幸せな新年を迎えるように。(MO)



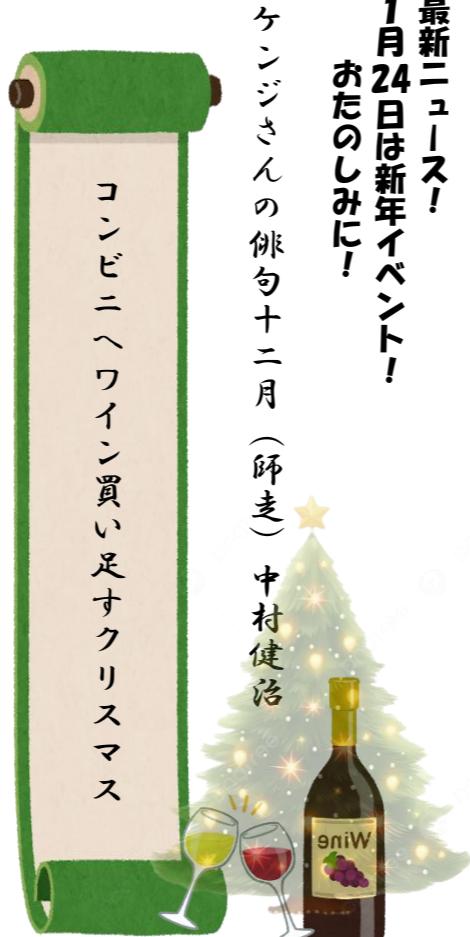
# オリーブ通信

<http://www.ne.jp/asahi/olive/kusatsu/>

あたらしい なかまをしようかい します



スタッフ(7月入会)  
グエン チイ ニヤト ラン  
日本語、ベトナム語、英語が話せます！初めてのボランティア頑張ります！よろしくお願ひします。



国際教育企画顧問 中川良雄

デパートに入ろうと、入り口のドアの前に立つたら、大柄の外国人が店から外出しようとドアを引いた。「お先にどうぞ」と促してきたので、その行為に甘えて、先に店内に入り、「ありがとうございます」と言って、深めに頭を下げた。するとその外国人は、深々と頭を下げ、「いいえ、どういたしまして」と言わんばかりに私を見送ってくれた。私の行為に日本人らしさを感じたのか、それとも哀れさを感じたのか。

日本の円安からか、インバウンド訪日外国人は増加の一途である。名所を訪れたり、飲食を楽しんだり、日本文化を体験したりして、それぞれに日本滞在を満喫して帰国していく。

お辞儀をして挨拶する、「お先にどうぞ」と先を譲る、そんな日本人の精神が最近薄らいでいるのが寂しい。ドアの後ろに人がいてもドアを閉める、エレベーターを我先にと乗り降りする。昔はこんな哀れな思いをすることはなかった。

フランス・パリへ行った際、地下鉄通路のドアを後からやって来る人が見えたなら、すっと開けたまま待っている、後の人は小走りでやって来て、Merciとお礼を述べる、そんな行為が当たり前になっている。日本でも見習ってやってみたが、「おかしな人」と思われるそなでの、やめてしまった。

日本へやって来る人たちには、飲食を楽しむのも、お目当ての商品を購入するのもよいが、日本人の「おもいやり」や「配慮」の精神を学んで、おなかいっぱいにして帰ってほしい。日本人が日本人らしさを受け継いでいくのはもちろんのこと、海外へ旅行した際には、○○らしさをカバンの中に詰め込んで帰りたい。

インバウンドから日本を学ばせていただいた一日であった

## インバウンド

182



2025年  
12月号  
2025. 12. 13 発行  
第 284 号

11月1日、立命館大学でKIFA主催の「初級向け教え方講座」がありました。講師は台湾の大学で教鞭を執っている若き日本語講師の堀野善康さん。日本語指導初心者にも、古株の我々にも、実践すぐに役立つ授業のコツなどわかりやすく教えていただきました。堀野さんは、なんとかつてのオリーブのメンバー！入会は2014年10周年パーティで音響を担当してくれたことをよく覚えています。経験を積んでいい教師になられたなあと感慨深かったです。その堀野さんにご寄稿いただきました。（恩地）



「僕の日本語の先生になってください！」

私は、新卒で就職した会社の食堂で、インドネシア人の技能実習生にそのことばをかけられました。

私は元々英語専攻で、大学でも留学生寮寮長なども経験し、留学生との交流も多かったです、「留学生が日本語を勉強する」というのを目にして、日本語教育というのには関心がありました。しかし、その時はすでに大学4年生。すでに内定を得た海外営業部のあるその会社で働いていました。しかし、最初から海外営業部に就任できるわけはなかったのですが、とにかく興味があったのが国際交流！そこで、技能実習生とたくさん交流し、上のことばをかけられたというわけです。

それがなんと、オリーブとの出会いでした。そのインドネシア人とは、今では伝説的な存在（？）のバエヌルさんとメイディさんです。オリーブに初めて行った時、たくさんの外国人の方が熱心に日本語を勉強しておられ、私はとてもワクワクした気持ちになったのを今でも覚えています。そこから毎週教室通うようになり、皆さんと授業後にも食事に行き、その中で日本語教師養成講座について船見先生という方からお知らせがあり、気がついたら会社を辞めて養成講座を受講していました。

そこから糸余曲折があり、コロナが始まった2020年から5年間台湾で日本語を教えました。台湾では最初の2年は台南の語学塾、後の3年は高雄の大学と高専高校の日本語学科で教鞭を取りました。台湾は戦前に日本統治時代があり、日本の植民地として支配され、日本語が国語として教育されました。しかし、現代の台湾人のgあと話しても、私が日本人であるというだけで老若男女問わず「こんにちは！」とあいさつしてくれたり、朝ごはん屋さんでは飲み物をサービスしてくれたりと、5年間で台湾の方々の温かさに触れ、台湾は世界一の親日国ではないかと思っています。

また、日本語の人気も一番高く、大学日本語学科にはたくさんの学生がいます。私は夜間部の社会人クラスも担当したことがあり、初日には「本当に先生ですか！？」と、年上の学生さんたちに言われ、そのクラスではカラオケに連れて行ってくださったりと大変お世話になりました。

今では帰国をし、来年からは立命館大学で教鞭を取ることになりました。目まぐるしく変わる私の環境ですが、あの時のバエヌルさんとメイディさんのことばは一生忘れ難いでしょう。私の日本語の旅はまだまだ続きます！ 堀野善康



高雄の大学夜間部の皆さんとの卒業写真



台南の語学塾の学生さんたちと飲み会



講座の様子 11月1日

1995年、彦根で行われたスピーチ大会に出場したオリーブの学習者横山シルビオさんが会場賞を受賞しました。それから30年、今夏、彼は亡くなりました。彼のスピーチを読み返してみると、日本で暮らす外国人の立場や思いに改めて気づかされ、オリーブの活動の意義についても深く思いが至ります。ぜひみなさんと共有したくここに紹介いたします。

## saudade



「サウダーデ」

横山 シルビオ貴志（ブラジル）

皆さんこんにちは。3年前にブラジル・サンパウロ州から来ました、横山シルビオと申します。よろしくお願ひします。

公式の理由では、働くために来ましたので、最初の2年間は大阪で働きました。その間、同じ寮のブラジル人や同じ現場の日本人以外には、友達は一人も出来ませんでした。そして、働くこと、食べること、寝ること以外には、何にもしなかったと言ってもいい生活でした。

面白みのない寂しい生活は去年の9月に、滋賀県へ引っ越しして来てからも3ヶ月程続きました。その後、草津市に日本語教室があると聞いて、友達と行きましたら、日本人のボランティアと大勢の外国人が楽しく日本語を勉強していたので、私も一緒に教えてもらいうようになりました。

もう1年になりますが、滋賀県に来て生活だけじゃなく、わたしの人生がすごく変わりました。日本人のいい友達が一杯、そしていろんな国の友達も出来ました。楽しいパーティやイベントに参加して、自分自身の世界が広がりました。そして、8ヶ月前からポルトガル語教室を開いてもらって、私自身がポルトガル語を日本人へ教えることになりました。

そのポルトガル語のひとつ、「サウダーデ」という言葉を今日のテーマとして皆さんにお話したいと思います。

辞書通りでは、郷愁・なつかしさ・恋しさ・やるせない思い出・どこかへ戻りたい・誰かに会いたい気持ち等の意味で載っています。サウダーデというのは、これらのすべての意味を含めて私自身よく分かっている気持ちです。まず、家族から離れてサウダーデを感じます。あたたかい心の大切な友達とも長い間会ってないためサウダーデです。自分が生まれ育った国から飛行機で24時間もかかる地球の正反対の所へ來てももちろんサウダーデです。

しかし、サウダーデを一杯感じる生活をしていかなければならないのなら、自分のためになることをしないといけないと思い、日本のこと、日本人のいい所を覚えて自分自身を成長させようと思っています。

皆さん、私は、サウダーデは過去だけに関係のあることではないと気づきました。今後、長い間ずっと日本にいることも十分考えていますけれども、いつかブラジルへ帰る可能性を考えるだけで、すごくサウダーデになります。好きになった日本に対するサウダーデ、大事な友達や日本のすごくいい人々に対するサウダーデ、そして今日のこと、皆さん達のことへのサウダーデ。

これから先、いつでもどこでもサウダーデは私から離れないものになりました。よく考えると、それが幸せのひとつの形になると思います。

今まで出会った沢山の人達、そして皆さん、サウダーデの新しい意味を私に教えて下さいまして心より感謝します。本日はどうもありがとうございました。



オリーブの仲間と飲み会。右手前がシルビオさん

シルビオさんを偲んで 小春京子

今年の7月、彼はオリーブのメンバーに看取られて息を引き取った。

オリーブができた当時は約90%がブラジル人生徒であったが、彼はその中の一人だった。

すでに日本語が話せて、どちらかというとスタッフ側との交流が多かった。

毎週オリーブの後は、好き寄りで居酒屋へ行つてはワイワイとおしゃべりしていた。

3年…もいただろうか？ オリーブに通わなくなつてからも、時々連絡はあったが、月日が経つとともに、誰もが彼とはだんだんと疎遠になっていました。

その彼から20年ぶりにスタッフの一人Uさんに電話があった。

「書類を手伝って欲しい。」久しぶりに見た彼は、当然老いていた。が、それよりも身体に不調があることがわかった。

それからあっという間だった。彼はすぐに入院し、命に限りがあると知られ、Uさんは、親戚や彼が親しかった知人に連絡を！と彼に聞いたが、日本に身内はおらず、親しい友人もおらず、

「何も楽しいことがない人生だった」と彼はつぶやいた。

それでも、Uさんは彼のいた頃（30年前）オリーブで関わった人たちに連絡をした。

数人が病院に駆け付けた。九州から来てくれた人もいた。スタッフ同士も、数十年ぶりに会う人もいた。

入院中はUさんに対してわがまま放題で、頑固だったにもかかわらず、納骨までお世話をしたUさん、Oさんをはじめ、彼のお別れの会で集まつた当時のオリーブ関係者は9人。亡くなる直前までうれしそうに満足げに言っていた彼の言葉を、今、噛みしめている。

「僕のおかげで、みんな会えたでしょ？」





